

## 日本の大学でイスラム教を学ぶ

ライター：千葉尚志 エディター：大友有人

「私はエジプトの若者よりもきちんと戒律を守っている自信があります。」  
明るくそう語るのは 19 歳の森山花彩(はあや)さん。彼女は東京外国語大学に通う  
大学一年生で、エジプト人の母親を持ち、生まれてすぐにムスリムとなった。エ  
ジプトで生まれ、ドイツで過ごしたのち 16 歳で日本にやってきた。

彼女は日本に来て戸惑うことがいくつかあったそうだ。その一つが食事に関す  
ることだ。「明らかにゼラチンが入っていきそうなのにハラールマークがついている  
こともあります。」彼女は笑みを浮かべながらそう話す。ハラールマークとはその  
食品がハラールに則っているということを認証するマークだ。ムスリムは豚肉を食  
べることを教えによって禁じられていて、実際、ゼラチンには豚の脂が使われて  
いることが多い。またアルコール類も飲むことはないそうだ。彼女たちにとって  
は食事もこうしたハラールによって定められている。教えを守るためにはコンビニ  
の食品の食材さえも入念に調べなければならない。もう一つ、礼拝が決められた  
時間にできないことも彼女は気にしている。日中は学校に通っているので時間が  
合わず、礼拝をする場所もほとんどないからだ。寝る前に 5 回分まとめて礼拝す  
ることもあるそうだが、それも宗教的に良いことではない。中学生のときのドイ  
ツでの生活では周りにトルコ系移民が多かったことから、食事や礼拝について気  
にしたことがなかったそうだ。しかし日本で暮らすようになってからは、周りに  
ムスリムが少なくなってしまう食事や礼拝について外では自分一人で管理しなけ  
ればならなくなってしまう。こうした経験から彼女はムスリムとしての自分に  
対して少し悲観的になることもあった。

「もしも私が高校生の時だったらこういった取材はお断りしていたかもしれま  
せん」。

しかし東京外国語大学のアラビア語学科に入り勉強するうちに彼女のムスリム  
としての自分への考えは変わった。「大学に入るとイスラム教徒でない教授から  
イスラム教の歴史や教えについて学ぶ機会が多くなった。そのおかげで、客観的  
にムスリムとしての自分をみるができるようになりました。」と彼女は言う。  
より専門的に歴史を学べるだけでなく、教えへの深い解釈ができるようになった  
のだ。そのことがもっとイスラム教について勉強したいという意欲につながって  
いるようだ。

日本の大学では、多くの大学が宗教に関して中立的な立場をとっていて、教授  
が信徒でないことも少なくないため、外からの視点でその宗教の教えや歴史の講  
義が行われる。だからこそ日本の大学では信徒自身も気付かなかった教典への解

積などを学ぶことができ、現地にいるよりも客観的でアカデミックにその宗教について見つめることができるのだ。

#### 編集後記

今回初めてムスリムの方とお話をして日本での暮らしの難しさや教えを守るために行っていることを聞いた。学校ではイスラム教について少し学んでいたが、直接話を聞いてそういったことを学べたので良かった。まさに百聞は一見に如かずであった。(千葉 尚志)